

追手門学院 第5回文章表現コンクール

『青が散る』 Award 受賞作品集

目次

『青が散る』（冒頭原稿）－宮本 輝氏－ 2

はじめに 4

短詩の部

最優秀作品賞 6

優秀作品賞 7

審査員特別作品賞 10

佳作 11

作文・エッセイの部

最優秀作品賞 16

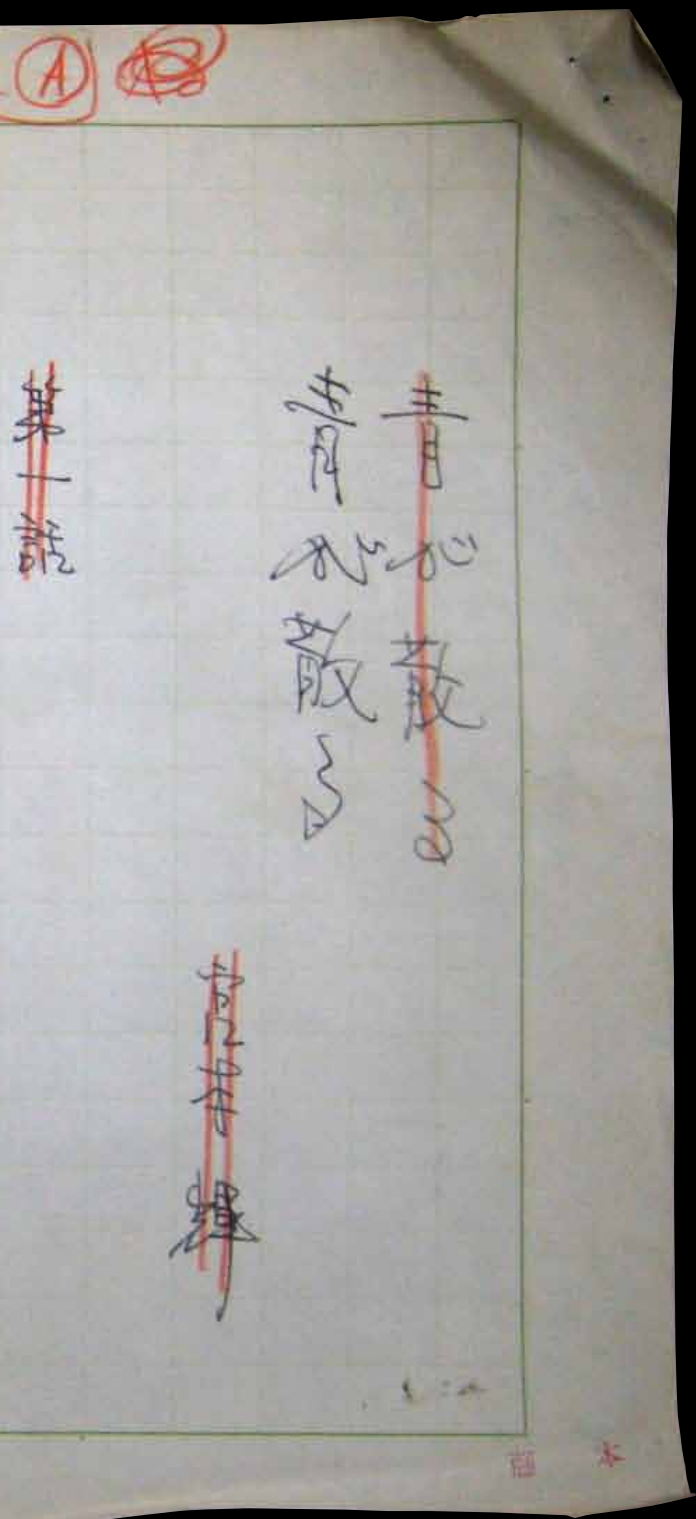
優秀作品賞 17

審査員特別作品賞 24

佳作 25

審査委員長講評 29

あとがき 31



宮本 輝 氏

『青が散る』

追手門学院大学の第一期生である宮本輝氏が、誕生したばかりの母校を舞台に書き上げた長編小説。芥川賞受賞直後に書き始められたが、著者の闘病生活をはさんで完成までに四年間を要した。創設された硬式テニス部に入部して、テニスコートを自力で造り上げたエピソードは有名であり、青春小説の傑作として読み継がれている。

青が散る巻頭さゆえ分

三月半ばの強い雨の降る寒い日、椎名燎平は、あまり気の進まないまま、大阪郊外I市に南学となる私立大学の事務局へ行った。

大学は田圃や農家に囲まれた衛星都市の一角の、小高い丘の上に建っていた。真新しい校舎のあたりからときおり強い風が吹き降りてきて、長リアスファルトの坂道を昇って行く燎平のズボンや安物のスウェードの靴をびしょ濡れにした。彼は途中で一度立ち停まり、首と肩と傘を挟みながら、靴の中の雨水を捨てた。
① 入学手続き最後の日。そのうえ夕暮近かったから、出来あがったばかりの雨靴とした

はじめに

—『青が散る』Award—は、第5回目を迎えた。本年も、学内外を問わず、『青が散る』に思いを寄せるすべての方々から、広く作品を募った。

今年のテーマは、「私の青雲のころざし」、「空想日記—10年後の私—」、「私のちょっといい話」の3テーマである。追手門学院は、1888年、明治の元勳・高島鞆之助によって、大阪借行社附属小学校として創設された。それから幾星霜、日中・日露の戦役、二度の世界大戦、敗戦と戦後復興、バブル崩壊など、目まぐるしく転変する社会情勢に翻弄されながらも、学院としての命脈を保ち、現在では、こども園から大学院までを擁する一大学園に成長している。そして、124年の歴史の中で、綺羅星のごとき有為な人材を世の中に送り出してきた。

この栄えある学院の未来を託された私たちが、常に銘記すべきことは、追手門学院創設者の「志」、それを受け継ぎ大切に育ててきた先人の「ころざし」であろう。主役となるのは、もちろん、次代を担う園児、児童、生徒、そして学生である。

この作品集には、厳しい審査を経て選出された25点の作文、短詩が、掲載されている。本文章表現コンクールを機に、追手門学院の大先輩、宮本輝先生に続く練達の書き手が、陸続と現れて、追手門学院の志をますます高からしめてくれることを願ってやまない。

短詩の部

【最優秀作品賞】

田上 大悟

おいカマキリ
なぜ目がみどりなんだ
周りのけしきも緑に見えるのか
おいカマキリ
なぜ目がバカみたいに大きいのか
おいカマキリ
大きなカマで自分をあらう時
体をきずつけないか
おいカマキリ
ずっと立っている
足はしびれないか
ぼくもカマキリになってみたいけれど
虫を食べるのはいやだ

(追手門学院小学校3年)

【優秀作品賞】

バドミントン

本田 智也

お父さんのうったはねは
シャーととぶ

お母さんのうったはねは
ポヨンととぶ

ばくがうったはねは
ポーンととぶ

なんで人それぞれ
ちがうんだらうな

(追手門学院小学校2年)

【優秀作品賞】

父の背中

徳原 眞子

そびえたつ

ビルの間の青い空
だまってみている

出発の日の父

(追手門学院小学校4年)

【優秀作品賞】

迷路

嶋田 美優子

今私は私という迷路をさまよっている
抜け出すのが怖くて抜け出さなくなると
まだこの心地良い場所にいたくて
でもいつかは抜け出さなきゃいけないと
いつまでもここに居るわけにはいかななくて
単純なようで複雑な 私の迷路

(追手門学院高等学校1年)

【優秀作品賞】

吉田 迅悟

素敵だらけで散らかりすぎて

この世界は少し歩みにくい

【優秀作品賞】

内藤 雄太

壊せ壊せ！とにかく壊せ！

…おっと昨日オレが創ったものを壊して
しもた。

(いわんこっちゃない)

(追手門学院大学経営学部2年)

(追手門学院大学教員)

【優秀作品賞】

私の青雲のころざし

東 敬朗

ころざし教えてくれよ雲の峰

(一般・大阪府大阪市)

【審査員特別作品賞】

伊藤 大将

十年後の自分は

十年前の自分に興味がないだろう

(追手門学院大学経営学部4年)

【佳作】

青

青が降る
青に染まる
ざわついた心が静まる
雨が降る
雨に打たれる
心がびしょぬれになる
僕の心に青がある
とても深い
だけどとても透き通って
何者にも汚されない

伊藤 吉朗

僕の心の青がうごめく
とても暗い
こんとんとした闇
一節の光がさし込んだ時
僕の心は晴れわたり
雲一つない青空のように広がる
大人になるとこの青は見えなくなるのだ
ろうか
この深き汚れなき青が
この暗くて闇の中を妨うばかりの青が
僕の青が散った瞬間
いったいどんな色が現れるのだろうか

(追手門学院中学校3年)

【佳作】

村田 祐也

まるくなる

反面教師

ダンゴムシ

(追手門学院高等学校2年)

【佳作】

高木 美歩

雨上がり、水たまりがハート型だったこと

(伊丹市立伊丹高等学校2年)

【佳作】

『大人』

久川 尚恵

幼い頃思い描いていた大人は、もっともっと強くてかっこよくて、眩しいくらいに輝いていた。
年齢だけ重ねて、
私は大人と呼ばれるようになった。
時折、怖くなる。
いつまでも中途半端で、
強くも弱くもなりきれない。
人間の愚かさと脆さを知って、
今をいっぱいいっぱい生きる。
私のなりたかった大人とは、
こんなにも遠い場所にいる。
そんな私を、今は目いっぱい抱きしめてやさしく、強く、愛してあげたい。

(追手門学院大学心理学部4年)

作文・エッセイの部

【最優秀作品賞】

私のちよつといい話

飯尾 充貴

この話は、ぼくの記おくとお母さんから聞いたことを合わせてみました。

ぼくは、追手門学院小学校一年になってから松原駅からあべの橋駅まで行き、地下鉄に乗りかえて天満橋の駅まで行ってきました。

その時から松原駅の駅員さんが改札口でぼくを見てニコリ笑ってくれました。ぼくもニコリ笑い、いつのまにか「ただいま」とあいさつしていました。駅員さんとは、話してもいっぱいしました。「学校楽しい?」「何したの?」としつ問してくるので、すぐになかよくなりました。そして、その駅員さんがいる場所が、ぼくの休けい所でお母さんが「すいません。申し訳ございません。」と言った事を覚えていきます。

一年ぐらいたった時に、その駅員さんからケーキをもらいびつくりしました。「今日で松原駅の仕事が終わってちがう駅に行くよ。みつくん。ありがとう。」って、わたされました。駅にむかえにきてたお母さんにその事を話すと、「駅員さんにありがとうと言うのは、みつくんでしょう。」と言われて、すぐに近くの花屋さんに行き、お花にメッセージカードをつけて、駅員さん

の所に持って行きました。カードには、「おにちゃん、いつもありがとう。いいおみつたかよ!」って書いたらしい。これからは、わすれている事も多いのでお母さんに聞いてます。

駅員さんはもうと頭を下にむけたままで「ありがとうと言うのは、ぼくのほうです。」と話したらしい。「ぼくは、新人研しゅうで松原駅に初めてきんむし、一年間すごしてきました。ぼくと同じように初めての男子のみつくんがいたのです。ぼくは、社会人になり、つらい事も多くて何度もやめようかとこの仕事があつてないのでは?、と思う事もあつたのですが、いつのまにか、毎日みつくんが帰ってくるのを改ざつ口で待てるのが楽しくて、今まで一年間続いたのは、この子のおかげです。感しゃしています」と言ったらしいです。

ぼくは、お兄ちゃんと会えるのが楽しみで改札口まで、忍者みたくにかくれながら、駅員さんのところに行つて「ワァ」て、おどろかせるのも大好きだった。駅員さんがいるから駅が自分の家みたいになつてたと思います。

それから、駅員さんがぼくに言った言葉は、おぼえています。メッセージカードを見ながら、「みつくん。おにちゃんじゃなくて、おにちゃんだよ。」て：あわててペンをかりて、にを消していきました。そうすると次は、「おにちゃん」になつて、みんなで大笑いしました。

なんだかお兄ちゃんの駅員さんに会いたくなつてきたな。今度会いに行つてみようかと思ひます。

(追手門学院小学校4年)

【優秀作品賞】

ぼくのちよつといい話

濱口 聖

「おはようございます！」と今日も大きなこえであいさつする人がいます。ぼくのマンションのかんりにんのいとうさんです。ぼくは学校ではともだちや先生に「おはようございます」とか「さようなら」とちゃんとあいさつができますが、きんじよではなかなかあいさつができませんでした。

エレベーターなどで、おじさんやおばさんといっしょになっても、ぼくがあいさつする前に「こんにちは」とはやくちでいわれて、エレベーターの出口のほうをむいてしまいます。あいさつしなきゃと思っているうちにエレベーターからおりてしまいます。「ああ、きょうもちゃんとあいさつができなかった」

かんりにんのいとうさんはおかあさんといるときに、よく「こんにちは！」とこえをかけてしゃべってくれます。かんりにんのせいふくが新しくなったときは、ぼくたちにけいれいもして

くれて、とてもたのしい人です。

ある日、ぼくが一人でかえって来たときいとうさんがむこうをむいて水まきをしていました。「よし、ゆうきをだしてあいさつしてみよう」と思い、大きなこえで、「いとうさん、こんにちは！」といました。いとうさんはこつちをみて「しょうくん、こんにちは！ きょうもあつついねー」といつてくれました。ぼくはなまえをいってもらえてとてもうれしかったです。

それからほかのきんじよの人にもおおきなこえであいさつができるようになりました。

ありがとうございます。

(追手門学院小学校2年)

【優秀作品賞】

おじいちゃんと私のちよつといい関係

神谷 稚子

私のおじいちゃんはもの知り博士です。

私が質問すると、何でも教えてくれます。もし、おじいちゃんでも分からない質問があった場合、必ず次の日までには調べて、私に教えてくれます。

朝、起きたらテーブルの上に

「ちこちゃんへ

昨日の質問について答えます。

それは、……です。 じいじより」

というように。このようなおじいちゃんからの手紙が私のファイルにたくさんはさんであります。

毎朝の通園・通学時車内でも、おじいちゃんはたくさんのお話をしてくれました。「今日は何の日?」「今日の朝礼で校長先生はきつとこの話をして下さるのでは?」など。

おじいちゃんとの朝の会話のおかげで、私は他のお友達とは違う朝礼の楽しみを持つことができ、幼稚園の時も、小学生になっても、ずっと休むことなく毎朝元気に通うことができました。

そんなある日、おじいちゃんが入院しました。私は「今日のお天気」や「新聞の記事」をお話しする為に、毎日お見舞いに

行きました。おじいちゃんは待つてましたという顔で、私にいろいろな問題を出してきて、私の質問にも答えてくれました。

おじいちゃんが特に得意なのは植物についてです。春の七草や秋の七草。散歩中に見つけた草花の名前や効用、性質について。ドライブの時に車内から見える街路樹の名前などなど。一緒に作った家庭菜園もあります。

今年の一月末、青い空から雪が降りました。この日私とお母さんは、おじいちゃんの病室で童謡をたくさん歌っていました。静岡出身のおじいちゃんの為に、富士山の歌も。

「頭を雲の上に出し。四方の山を見下ろして。雷様を下に……!! 次は何だったっけ!?!」

私もお母さんも歌詞が分からず、「次は何だった? じいじ覚えている? また今度教えてね。」おじいちゃんは眠っていました。口が少し動いたように見えました。これが、私の最後のおじいちゃんへの質問になりました。

おじいちゃんが天国に行った次の日も、青い空に雪でした。

こんな日はいつも、

「晴れた空に雪が降ることを何と言う?」

「風花!!」

おじいちゃんとの会話を思いだし泣いていると、二歳の弟がCDをかけてと持ってきました。すると二曲目にあの富士山の歌がながれたのです。「頭を雲の上に出し。四方の山を見下ろして。雷様を下に聞く。富士は日本一の山」答えは「下に聞く」だったんだ。

これが、おじいちゃんからもらった最後の返事です。

おじいちゃんありがとう。教えてくれた事、青空からも返事をくれた事、私は忘れないよ。

(追手門学院小学校5年)

【優秀作品賞】

空想日記―10年後の私―

君付 乃野

今、私のお葬式が終わった。お父さんやお母さん、お兄ちゃん、弟、みんな泣いていた。私は車にはねられて即死した。即死だったので痛いとか苦しいとかの感情は一切無かった。気付くと空に浮いていた。しかしみんなは私の事が見えていないようだ。その時私は、死んだんだと分かった。下を見ると血だらけで倒れている私と、私の腕の中で泣いている小さな男の子がいた。

私はスーパーに買い物に行く途中だった。大通りの交差点で信号待ちをしていたのだ。すると、向こうに泣きながらこっぴど手を振る女の人が見えた。突然隣で信号待ちしていた五歳ぐらいの男の子が、たくさん車の猛スピードで走っている道路にとび出した。突然の事におどろいたが、何も考えず私も道路にとび出した。私の頭の中は、男の子を守る事しか無かった。あの時の急ブレーキの音は今でも頭に残っていて、二度と忘れない。

私は中学生の頃からずっと、人の為に死にたいと思っていた。誰かの為に自分を犠牲にする事がかっこいいと思っていた。そして、今私は人の為に命を犠牲にした。後悔などしていない。出来る事なら家族に「今までありがとう」と礼を言いたいだが、

私の家族なら分かってくれるはずだ。私はそう信じている。

そんな事を考えている間にお母さんがバタバタしはじめた。誰か来るみたいだ。五分ぐらい経つと、見覚えのある女の人が会場に入って来た。その女の人は私に線香をあげると、お母さんの元へ歩いて行き、深く頭を下げた。「本当に、本当に申し訳ありませんでした。」この女の人、男の子に手を振っていた人だと私は思い出した。お母さんと女の人の会話を聞いていると、女の人は男の子のお母さんらしく、男の子は腕にすり傷を負っただけで助かったそうだ。事故の時、男の子と男の子のお母さんは二人で散歩に行っていて、男の子が迷子になったらしく男の子のお母さんは必死に探していたそうだ。そして事故が起ったあの交差点で二人は会えたらしい。

お母さんは、「謝らないで。」と女の人に優しく言った。男の子が助かって良かった、と涙を一粒こぼして言った。私はこの人がお母さんということに誇りを持った。自然に私の目からも涙が出てきた。この人の元に生まれてこの人に育てられて良かった。心からそう思った。

今から私は天国に向かって歩き出す。自信を持って、胸を張って歩いて行く。嬉しかった事、悲しかった事全部全部死んだおじいちゃんに話してあげよう。死んでしまったチワワもいっぱいいっぱい遊んであげよう、と私は心に決めた。

こうして二十三年間の短くて、でも誰よりも幸せだった私の人生は幕を閉じた。

(追手門学院大手前中学校2年)

【優秀作品賞】

理想の男

大江 慧

僕はよくみんなからいじられていた。

僕はその事をあまり気にしていなかったし、僕がいじられて他の人が笑ったらそれでいいと思っていた。しかし中学生になるといつのまにかいじりがいじめに変わった。中学校で部活に入ると、先輩からいじめられた。毎日、毎日石を投げられたり、顔を平手打ちされたり、とにかく色んなことをされた。しかしその現場に居た友人は誰一人助けってくれなかった。何度も本気で部活を辞めようと思っただけど、先輩が恐くて辞められなかった。そんなある日、部活に新しい人が来た。見た目はヤンキーでかなり気合の入った人だった。最初は「絶対に関わらんとこう」と思っていた。そして何日か過ってその新しく入ってきた人が先輩にいじめられている僕を見た。僕は「どうせ見て見ぬふりをするんだらうなあ」と思っていた。しかしそいつは僕の方に近づき「しょうもないことすんなよ」と言ってくれた。しかし先輩は新入りが何をいきつとんねんと激怒し、その新入りとこの場でケンカが始まった。しかし相手は四人、勝てるはずがなかった新入りはボロボロになりながら僕に近づき「大丈夫か」と言ってくれた。僕は感動してしまった。

誰も助けられなくて学校も休みがちになっていた僕にとってその一言はとても温かかった。まるでくもり空から一気に快晴の青空になるような感覚だった。しかし新入りは回りの人から見たらただのヤンキー、性格は血の気が多く、ヤンチャばかりしていた。だけど本当は誰よりも人情味がある、熱い男だった。そんな奴が一度だけ涙を見せることがあった。それは中学校の部活で最後の試合だ。

彼は人前では決して涙を見せる性格ではないのに涙いていた。それを見た僕も思わずもらい涙きしてしまった。そんな彼はスポーツ推薦で高校に行き今も元気にスポーツをしている。彼が最後に流した涙はとても価値のある物だと思うし、僕もそんな涙を流してみたいと思った。彼は色んな所で尊敬する所が多かった。だから僕はそんな彼を今も昔も目標にしていくつもりだ。

(追手門学院高等学校1年)

【優秀作品賞】

私のちよつといい話

北中 沙耶花

私には尊敬している人がいます。中学の担任の先生と大学の先輩です。中学の担任の先生はとても熱血で一人一人に対して向き合ってくれ、ハンドボール部の顧問もしており先生が来てからわずか三年で全国大会へ導く指導者としても先生としても素晴らしい先生です。大学の先輩は皆に優しく、時には厳しいチームのムードメーカー的存在で皆に慕われる先輩です。そして、私にはもう一人尊敬している人がいます。それは四つ下の弟です。弟は小学校の頃、とても面倒くさがりで、食べる事、寝る事、ゲームが好きないわゆるグータラでした。私はテニス部に所属し、毎日真っ黒になるまで練習していたスポーツ少女だったので私はそんなだらしのない弟が気に食わず、毎日喧嘩をしていました。高校はテニスの推薦を受けて入学し一年が経った頃、弟は中学に入学しました。新学期が始まり、一週間が経った頃弟は「俺、ハンドボール部に入った。」と言いました。私は内心冗談だと思いました。なぜなら私の尊敬するあの熱血な先生の部活で、ゲームばかりしていた弟がいきなり全国大会にも出場する部活でやっていけるはずがない、どうせすぐ辞めるだろう、と思っていました。その頃私は高校で毎日朝から晩ま

での練習で「しんどい。早く引退したい。」が口癖となり弱音ばかり吐いていました。逆に弟は夏休みが三日間しかない部活に一日も休まず、みるみる体も筋肉質になり、日焼けで真っ黒になっていき、弱音は一切吐かず部活に行っていました。二年生の時にはスタメンもとり、全国大会のメンバーにも入ったと嬉しそうに話す弟を見て、私も負けてられないと思いました。中学では副将を任せられ、高校は推薦を受け入学しました。一年の時から試合に出場し、現在では主将を任せられています。私は先日初めて弟の試合を観に行きました。普段とは違って先頭に立って仲間をまとめている姿、一生懸命プレーをしている姿を見て心が痺れました。それは昔の弟からは想像できないくらい立派な姿でした。ある日、部活から帰ってくると弟は坊主頭となっていました。どうしたのかと訊ねると後輩がミスをしてしまい、その学年は坊主にしようとなったが一人が坊主を拒否し辞めようとしていると相談を受け、自分も坊主にして話をすれば納得してくれるのではないかと思いついたんだと言いました。それを聞き私は本当に驚き、初めて弟を尊敬しました。私は自分の弟を誇りに思い、自分も部活動を今まで以上に頑張り、思いやりの気持ち忘れずにいようと改めて思う事ができました。それと同時にやる気が出ました。私にとって弟は一番身近な尊敬する人物です。これが私のちよつといい話です。

(追手門学院大学国際教養学部4年)

【優秀作品賞】

空想日記―10年後の私―

大塚 芳雄

当年とって八四歳。左半身不随の身体障害者（二級）の私の一〇年後の目標は歩くことです。

私は八年前の二〇〇六年八月、脳出血で倒れ、救急車で国立循環器病研究センターに運びこまれました。

集中治療室で治療を受けたことを今だに覚えていますが、それは、点滴でした。破れた血管はふさがり、一週間で治りました。

これに伴ないセンターから箕面病院に転院を命ぜられました。箕面病院はリハビリテーションに特化した病院です。リハビリを辞書で引くと「機能回復訓練」と有ります。私は箕面病院で逢坂医師、川瀬療法士指導の下、3ヶ月間リハビリの基礎を叩きこまれました。

リハビリとは、どんなことをするのでしょうか。車椅子へ座ることさえままならぬ身です、現状は、おじぎをしたまま座りました。車椅子でまともな座り方になるには一ヶ月を要しました。

- 一、マッサージを受ける。
- 二、動くベルトの上を歩く。
- 三、自轉車を漕ぐ。

四、木製の動く鞍に乗る。

脳の前頭前野の空白部分に、新しい神経回路を、一〇年計画で作る壮大な挑戦です。以上は週四回介護施設で受けますが週三日は自宅で、六畳の板の間（目測約三米）を五〇回、二五往復します。その後、マッサージチェアに坐ります。

実は私は今でも、左足に装具をはめ、杖をつけば、公園などで四〇〇米は歩けます。倒れたら起き上がれないので、家内同伴です。一〇年後の私は勿論、装具も杖もなく、颯爽と歩くことを意味します。

私は五臓六腑は丈夫です。豊中市の市民検診を毎年受けていますが、指摘事項はありません。これあればこそ、八年もの長きにわたる後遺症との闘いに耐えてこれたのだと思います。

私はこの病氣特有の言語障害も嚙下障害もありません。この間の事情については、ノーベル賞候補になった碩学、多田富雄先生の著書「寡黙なる巨人」に述べられています。

この間、多くの親戚、友人が他界されました。大半は癌でした。治ったならば、どうするか。旅行したいです。行き先はもう決めています。外国ではイスタンブール。此所は昔、ビザンチン帝国の首都だった頃、コンスタンチノブルと呼ばれていました。

国内では三か所、一、国譲りの伝説の出雲大社。二、日本陸軍の創立者、大村益次郎ゆかりの伊予、宇和島、三、閑けさや岩に染み入る蝉の声との芭蕉の句で有名な出羽立石寺です。

（一般・大阪府豊中市）

【優秀作品賞】

私のちよつといい話

岡森 祐

父が七月二十三日に他界した。私は、その日も学校で仕事をしていた。病院から危篤の電話があり、すぐに父に会いに行った。しかし、もう、ほとんど息がなく、私は父の手を握り、

「五十五年間、私を育ててくれて、ありがとうございます。」

と。父は、右手を少し挙げ、静かに息を引き取った。素直に感謝の気持ちを言葉で伝えることができて、よかった。

その後、私の息子と娘も病院へ駆けつけた。もう息がなかったが、孫たちは、祖父と最後の別れをした。

さて、娘は、高校二年生。学校から急いで電車に乗り、最寄駅からタクシーで病院へ来た。祖父のことを考え、悲しそうな顔で無口でタクシーに乗っていた。病院へ着き、支払をしようとしたところ、運転手さんは、

「もうお金は、いらさないから、早く行きなさい。」

と。娘は、お礼しか言えず、病室へやって来た。

このことは、後で娘から聞いた話で、私は、世の中に、こんなすてきな人がいるんだなあと思った。この場を借りて、運転手さんに、

「ありがとうございます。」

と。お礼を言いたい。そして、天国の父にもその話をしたいと思う。

(追手門学院小学校教員)

【審査員特別作品賞】

私のちよつといい話

積木 ゆり奈

私は、お手伝いが大好きです。家の中でお手伝いをしていると、『小さなママ』になった気分になります。

私のお手伝いをする時のポイントは、たのまれたことだけをすることではなく、たのまれたことプラス自分がきがついたこともすることです。例えば、ご飯の前、お母さんに「食たくをふいてきて。」と言われたら、食たくをふいた後に私は、おはしおきとおはしもならべておきます。ほかには、「せんとく物を取り入れておいて。」と言われたら、取り入れておくだけでなく、私はたたんでおきます。

こういう風に行っていると、お母さんに、「ほんとうによく気がつくね。私が小さい時はそんなに気配りはできなかったよ。」と言われました。小さい時から、ほめてもらおうとよけいにかんばる私です。

では、私の大すきなお手伝いベスト3をしょうかいたします。第三位は、せんとく物をたたむことです。なかでも、Tシャツをたたむのが得意です。しわをのばしてピシッとたためた時は、ヤッターという気持ちになります。

第二位は、ゆかのふきそうじです。ぞうきんをかたくしぼって、

力を入れてすみからすみまでふいていきます。キュッキュツと音が鳴るのが好きです。終わるころにはあせをかいています。が、とつてもさわやかな気持ちになります。

そして第一位は、食器あらいです。うちには三種類の食器あらいせんざいがおいてあって、その日の気分で選びます。私の一番のおきにはジャスマンの花のかおりがするせんざいです。カレーやパスタ用の大きなお皿は、私の手にはまだ大きすぎてあらいくいのですが、わらないようにかんばってあらっています。おちゃわんや小ばちはあらいやすいので鼻歌を歌いながらあらっています。

まだ、小学四年生なので、火をつかったお料理はあぶないから……といってさせてもらえませんが、お料理もとつてもきょうみがあるので、はやく大きくなって家族のためにお料理を作つて、おどろかせてみたいです。

このように、これからも時間を見つけてお手伝いをつづけていこうと思います。

(追手門学院小学校4年)

【佳作】

ぼくのちよつといい話

松村 周

ぼくのおばあちゃんは、アルツハイマーと言うびょうきになってこうちからぼくのすんでいる大きさにひっこしてきました。

ぼくの家からちかいところにすんでいるので、時かんがあればぼくは母さんといっしょにあいに行く。おばあちゃんは、むかしのごことは、よくおぼえているけれどもついさっきのごことはすぐわすれてしまう。おなじことをぼくになんども聞くけどぼくはなんどもこたえてあげる。そうするとおばあちゃんがにっこりとわらってくれるからうれしくなる。この前はコマをもっていっていっしょにあそんだ。ぼくは、おばあちゃんがよろこびそうなことをかんがえている。なぜかとゆうとわらうとちよつ

とてもびょうきがよくなると聞いたからです。

アルツハイマーとゆうびょうきは、ぼくには、あまりよくわからないけど今は、なおすくすりがないそうです。おばあちゃんは、まだまだ元気なので、ぼくが大人になったらこのふしぎなびょう気をけんきゆうして、なおしてあげたいと思っています。くすりができるまで、ぼくのわらいがおばあちゃんにとつて今のくすりです。

(追手門学院小学校2年)

【佳作】

「私のちよつといい話」

正本 彩華

平成二十三年十月十六日に、私を育ててくれたおばあちゃんが亡くなりました。

おばあちゃんのお見まいに行くと、おばあちゃんはおうれしうに酸素マスクを外して「彩ちゃんお帰り」と言ってお笑っていました。じゅくでどんなにおそくなっても、おばあちゃんはおんごはんをまつていてくれました。

テレビをつけて、みんなでまるで家にいるようにワイワイごはんを食べました。ごはんが終わると、おばあちゃんが千円ずつ私と弟におこづかいをくれます。そして、二人でおつりを合わせて十円のガムも買えない位まで好きなものを買ってきなさいと言います。私はうれしくて、ポテトチップスやアイスクリームやジュースなど、いっぱい病院の地下のコンビニエンスストアで買いました。

病室にもどると、おばあちゃんと一しょにおやつを食べました。

そんな日が、一ヶ月ほど続き、自分で呼吸ができなくなったおばあちゃんは、人工呼吸器を入れてICUに入ってしまった。夜中にかけてつけた時には、おばあちゃんのはのに管を入れてねむっていました。私が話かけると、うなずいてくれました。

おばあちゃんが楽しみにしていた運動会がとうとう来てしまいました。弟のリレーと私のダンスを見るのを楽しみにして

ました。

お父さんが、主治医の先生にたのんでビデオをおばあちゃんに見せてあげたいとたのみました。主治医の先生は管をぬくと息ができなくなるので、無理だと言いましたが、私のお父さんは「おばあちゃんは、運動会を見たくてがんばってガンと戦っていたので、けじめとして見せてあげたい。死んでもそれが本望です。」と何度もたのみました。お父さんは、医者なので叶ったのかもしれないが、おばあちゃんに運動会のビデオを見せてあげようということになりました。でも、ますいをとつても目を覚まさない時は、さよならをしなければいけなくなり

ます。家族とおばあちゃんの兄弟が見守る中、ICUのおばあちゃんのみすいは、少しずつ覚まされていきます。みんなをたたいたり、うでをさすつて名前を呼んで起こしました。すると、おばあちゃんは目を開けようとしてまぶたを動かしました。みんな泣きながらおばあちゃんにお礼を言つてビデオを見せました。ビデオが終わつてまた、ますいがかかりました。おばあちゃんは目からなみだを流し、管のささった口を精一杯動かし「ありがとう。」と言っている気がしました。

次の日、おばあちゃんは天国に旅立ちました。後から聞いた話ですが、おばあちゃんは私達にねたきりのままのトイレをするすがたや、はいている所を見せてはかわいそうだと、わざと買いたるに行かせていたそうです。

今でも青い洋服をきたよそのおばあさんを見ると、おしゃべりだったおばあちゃんを思い出します。追手門小学校に入学できたのが、うれしくていつも大好きな青色の服を着て参観に来てくれました。今年も全部の行事を天国から見に来てくれると思います。

おばあちゃん、いつまでもみんなを天国から見守っていてください、あの青いとても似合っていた服を着て…。

(追手門学院小学校5年)

【佳作】

「誕生日」

塚本 啓太

この話は僕が高校一年生の夏休みに家族と食事に行ったときのことです。

夏休み期間中だった僕は家族四人でよく行く近所のファミリ―レストランに晩ご飯を食べに行きました。いつも通り楽しく食事をし、座ってゆっくりしている時、お店の照明が少し暗くなりしました。なぜなのか不思議に思っていると、店員さんがろうそくをさしたチョコレートケーキを持って来ました。そのケーキは僕が座っていたテーブルの横に座っていた五才くらいの女の子の元へと運ばれました。すると、ケーキを運んできた店員さん二人がハッピーバースデーの歌を手拍子とともに歌いだしました。それと同時に、僕の家族を含め、女の子のいるテーブルの近くで食事していた人達もナイフやフォークを置き、自然と一緒に手拍子を始めました。店員さんが歌い終え、ろうそくを吹き消した後の女の子の顔は少しの恥ずかしさと、喜びが入り混じったような、とてもいい笑顔をしていました。

僕はその食事の帰りにふと、不思議に思いました。それは、なぜ、僕は他の人の誕生日を自然と祝福することができるのかということでした。思い返してみると、あの女の子を祝い、

手拍子をしていた人達は皆、我が子の誕生日を祝っている様な笑顔をしていたのです。僕も、自然と笑顔になっていたのだと思います。そういったことを思い出すと、不思議に思ったことに対する答えはすぐに見つかりました。それは、人は他の人が感じた喜びを共有することができる生き物だからなのだ。というものでした。だからこそ、あの場にいた人達は全く見ず知らずの女の子の誕生日を祝うことができたのだと思います。この事柄は悲しみや苦しみといった感情にも当てはまる気がします。その人のもつ悲しみ、苦しみをも分かち合うことで、支えになったり、心の負担を少しでも軽減させるはずです。

僕は一人の女の子の誕生日を祝福することで、人が本質的にもっている温もりや、思いやりの心に触れ、心が温かくなりました。これからも人と人とのつながりを大事にしていきたいです。

(追手門学院高等学校2年)

【佳作】

「今の私と志」

矢野 愛実

私はいつも、他人を好きでいよう、愛していようと思って生きてきました。そういうふうに見えるようになった原因はたくさんあります。一言で言ってしまうえば、生まれてから十六年の集大成です。具体的に言うと、寂しがりで他人を嫌えないこの性格と、なんでもすぐに忘れてしまう少々困った癖のせいだと思います。

実際、今後ろを振り返ってみても嫌いだといえる人物は一人としていません。そもそも、他人を嫌うのはなかなか難しいことです。悪口を言う人だって本当は真剣に嫌悪感を抱いている訳ではないのです。ちよつと羨ましいな、と思った結果だと思います。

寂しがりだ。というのはよく兄弟に言われました。私は三人兄弟の一番上なのですが、どういうわけか一番寂しがりで、一人ぼっちを嫌がりました。近くのコンビニに行くのに妹を伴ったり、本を読むときでも勉強中の弟のすぐ横で読んだり、自分でもどうなんだと常々思っています。

少々困った癖である、忘れっぽいところは、かなり深刻な状態とも言えます。部屋を移動しただけで、ぼんと忘れてしまっ

たり、ひどい時は一歩踏み出しただけで忘れることもありました。そんな困った癖も、たまの喧嘩の時は、呆れるような働きをしてくれます。なにしろ、数秒ぼんやりしてすぐ、「公園行かへん？」などと、まだ怒り心頭の相手に言えてしまうのです。

性格や癖以外での原因もあります。中三の晩夏、大型トラックに轢かれたことです。幸いなことに痕が残るほどの傷はありませんでした。けれど、弾き飛ばされて一瞬だけ意識を失った時、「人間なんてすぐ死んでしまう生き物なんだ」と身をもって気付きました。すると、明日が人生最後の日かも知れないと考えだして、不思議なことに自然と、自分を含めた全てに優しくなれました。

そんな私の志と言えるものは、「誰か」の「何か」になることです。他人を好きでいよう、愛していようと思いついた結果、たどり着きました。そこまで上等のものではないと思いますが、私にはこれしかありません。きつと、事故に遭ったことも意味があつたのです。

最後に、独立自彊、社会有為について。結局、私は「誰か」の特別になれる人になりたいのです。そうなったら、何をもらえるか、何をかえせるか、全く分かりません。私自身は、特別をもらえらると思います。けれど、かえせるものが何かは分かりません。ただ、もらった同じ分、あるいはそれ以上の、その人だけの「大切」をかえせると、それだけは言えます。

(追手門学院大手前高等学校2年)

武庫川女子大図書館長・教授
前芦屋市谷崎潤一郎記念館館長

かわち 河内
きょうたろう 鏡太郎

五回目です。ずっと審査員として、みなさんの文章と向き合ってきました。「書く力」は、確実に強くなっていると実感しました。とりわけ児童・生徒たちは、自分にしか書けないテーマを見つけ出し、それぞれの言葉で表現できるようになっています。「書く力」は「読む力」「伝える力」と合わせて「基礎体力」だと思います。体力がついてきました。

『作文・エッセイの部』からです。

最優秀作品賞は「小学校高学年部門」飯尾充貴君の作品が選ばれました。構成が見事です。「この話は多くの記憶とお母さんから聞いたことを合わせてみました」で始まります。充貴君は通学で使う電車の駅員さんと友達です。でも一年後に駅員さんは別の駅に移ることになったのです。お花を買ってカードをそえて手渡しました。「おにちゃん、いつもありがと」。駅員さんは「みっくんが帰ってくるのを改札で待つのが楽しくて」と話してくれました。そして「おにちゃん」じゃなくて「おにいちゃんだよ」と。あわてて書き直します。こんどは「おにちゃん」になっていて、みんなで大笑いです。映像が浮かんでくるのは、優れた文章だからです。

優秀作品賞は「幼稚園・小学校低学年部門」では濱口聖君の作品です。マンションの管理人さんとのあいさつを通じて、学校ではできても、家の近所ではためらっていた「あいさつ」ができるようになります。管理人の言葉や仕草がうまく描かれ

ています。

「小学校高学年部門」の神谷稚子さんは、もの知りだったおじいちゃんのことを。会話のリズム感がいいですね。なんでも知っているおじいちゃんへの質問はある歌の歌詞の一部でした。良く晴れた日、おじいちゃんは旅立ちました。弟が持ってきたCDをかけてみると、その曲が流れました。最後の返事は青空からでした。展開が鮮やかです。

「中学部門」では君付乃野さんの作品です。

「今、私のお葬式が終わった」と書き出して、どきりとさせます。

——道路の向こうから母を求めて飛び出してきた男の子。その子を救うために、わたしは即死した。母の声が聞こえる。「謝らないで」と子の母にいつている。その声を聞きながら、この人に育てられて良かったと思う——。

自らの死という物語を組み立てていますが決して悲しくはありません。「いのち」という主題が貫かれています。

「高校部門」の大江慧君の作品。

——辞めようと思って部活に加わってきた新入りはヤンキー風だった。でも熱い男だ。先輩からいじめられている僕をボロボロになりながら守ってくれた。「大丈夫か」。そのひとは僕を救ってくれた——。

青春と友情。彼のすがすがしいエネルギーが伝わってきます。

「大学・大学院部門」の北中沙耶花さん。

こちらも部活が舞台です。グータラだと思っていた四歳下の弟がハンドボールを通して、大きく成長し、たくましくなってゆく姿を活写し、誇りに思うと綴っています。弟を見つめる姉の優しさがにじんでいます。

「一般部門」では大塚芳雄さんが選ばれました。84歳。もちろん応募者の最高齢です。「十年後の私」をテーマに選びました。94歳です。まだまだ訪ねてみたいところがあります。出雲大社、大村益次郎ゆかりの伊予・宇和島、芭蕉の句で知られる立石寺。きつと願いは叶います。力強いタッチです。

「卒業生・教職員部門」は岡森祐さんの作品です。

祖父危篤の報に高2の娘が病院に駆け付けました。タクシードを払おうとしましたが運転手は「ついから早く行きなさい」といつて受け取りません。不安な表情を浮かべていた娘を案じてくれたのでしよう。まさに「ちょっとしたい話」です。

審査員特別作品賞は「小学校高学年部門」の積木ゆり奈さんが獲得しました。素直な文章です。お手伝いが大好きな積木さんは、そのベスト3をあげます。①食器洗い②床のふき掃除③洗濯ものをたたむことです。Tシャツのしわを伸ばして「びしょ」とたためたときの気持ちを、生き生きと表現しています。一回、うなりました。

『短詩の部』に移ります。

最優秀作品賞は「幼稚園・小学校低学年部門」の田上大悟君の作品です。カマキリとの「対話」です。「おいカマキリ なぜ目がみどりなんだ」と語りかけます。引き込まれます。発想はどこから湧くのでしょうか。「ほくもカマキリになってみたいけど 虫をたべるのはいやだ」で結ばれています。この感性を大事にしてほしいと願います。

優秀作品賞は同じ部門の本田智也君です。

擬音の使い方が抜群です。バドミントンの羽根の音を父は「シヤー」母は「ポヨーン」「僕は」「ポーン」。五感を機能させるような文章が踊り出します。

優秀作品賞を続けます。

「小学校高学年部門」は徳原真子さんです。新しい任地に旅立つ日の父。その背を見つめています。青い空。父の新しい仕事がつまくなりますよつとと祈っています。焦点をきちんと合わせました。

「高校部門」は嶋田美優子さんの「迷路」です。だれも悩み苦しむ年代です。その揺らぎをうまく文章にできました。いつかは通らなくてはならない、それが「迷路」でしようか。「なくて」という言葉の繰り返し印象的です。

「大学・大学院部門」では吉田汎悟さんの作品です。「この世は少し歩きにくい」。これがきています。住みにくいほどではない、その軽さが若者らしいと思いました。言葉使いが丁寧です。「卒業生・教職員部門」では内藤雄太さんが選ばれました。笑いながらも考えさせられます。ボケとツッコミがたった三行で役割分担ができているのも面白く感じました。



記者時代のスクラップを読み直すことがあります。新聞記事と、エッセイや短詩とは違つと思えます。しかし、どちらもいい文章は具体性に富んでいるといつことばです。「詳細に神宿る」と教えられてきました。それも日々の新聞に掲載されるわけですから毎日、文章コンクールの審査を受けているようなものでした。一日書かなければ、「力」が落ちたように不安になりました。書き続けること。いつ文章への近道です。

「青が散る」Awardは、追手門学院創立一二〇周年を機に、二〇〇八年度に設立された文章表現コンクールである。追手門学院で学ぶ園児、児童、生徒、学生の文章表現能力を高めると同時に、教職員、卒業生のきずなを強め、追手門学院の教育活動を広く世間に知っていただくことを目的としている。五回目を迎えた本年度も、学内外を問わず、宮本輝氏の青春小説の傑作「青が散る」に思いを寄せずべての方々から、広く作品を募った。応募数は、作文・エッセー部門一、〇二三作品、短詩部門八九三作品で、いずれも力作ぞろい、しかも応募総数は過去最高だった。あらためて「青が散る」が描き出した鮮烈な青春群像が、いまだに色あせていないことに深い感銘をうけた。

このささやかな冊子に作品が掲載された受賞者の皆さんは、これを機に、ますます書く力に磨きをかけて、表現する愉しみを深めていただきたいと切望する。また、残念ながら受賞を逸した応募者の皆さんも、落胆しないでいただきたい。この冊子に収めることはかなわなかったものの、応募作品の中には素晴らしい美点を備えた作品が数々あった。どうか次回に捲土重来を期していただきたいものだ。

最後に、この紙面を借りて、「青が散る」Awardという稀有のタイトルを快く提供してくださった宮本輝氏に厚く御礼申し上げます。また、本務でご多忙のさなか、作文指導や第一次審査に取り組んでいた本学院の先生方、さらに、私とともに、最終審査に当たっていただいた武庫川女子大図書館長・共通教育部教授の河内鏡太郎先生はじめ、諸先生方、そして、煩雑な実務を丁寧かつ遺漏なくこなしてくれた教育研究所の事務職員・達城美歩さん、本当にありがとうございました。

追手門学院大学・教育研究所長

梅村 修

【最終審査委員一覧】

大川 繁樹 文藝春秋文藝局第一文藝部長

河内鏡太郎 武庫川女子大図書館長

(前 芦屋市合崎潤一郎記念館館長)

河内 厚郎 本学客員教授、夙川学院短期大学教授

豊島 真介 本学客員教授

梅村 修 国際教養学部教授、教育研究所長

追手門学院大学第5回文章表現コンクール
『青が散る』Award
受賞作品集

発行 2013年1月26日
発行者 追手門学院大学教育研究所
〒567-8502 茨木市西安威2丁目1番15号
Tel 072-641-9659
編集者 梅村 修
印刷所 株式会社NPCコーポレーション
〒530-0043 大阪市北区天満1丁目9番19号
Tel 06-6351-7271